



# 優秀賞

## 感謝

菊池 仁

口の悪い旧友らによると、私は「殺しても死なない男」なのだそうだ。まるで人間ではないようなことをいう。やや腹は立つものの、実は、私自身も長い間そう思ってきた。

その不死身の私が突然入院するハメに陥ったのである。

発端は腎機能の低下であったが、様々な検査を受けている間に厄介な病気が発見されたのである。特発性血小板減少という難病で、まだ治療法が確立されていないという。

担当の医師にそれを告げられた時、私は頭の中が真っ白になった。やっとの思いで家にたどり着いて妻に状況を説明すると、黙って聞いていた妻はにっこり笑って、思ってもみなかった返事をした。「お父さんも、これでやっと人間の仲間になれたわね」。私は多分、今にも死にそうな深刻な顔をしていたに違いない。日頃、不死身をうそぶいている男ほど、いざという時にはうろたえ、滅法、打たれ弱いのである。私は妻のこの一言にむっとした。一緒に深刻に思い悩んでくれるものと思い込んでいたのである。

私は即、入院となった。難病といいながら幸いにして身体のどこも痛くも痒くもない。時間がくれば腹もすく。食事制限のため体重は減ったが、見た目には病人とは思えない。すぐに危機的な状況に陥ることもなさそうである。これといった治療法がない中、担当医は懸命に試行錯誤を繰り返している。しかし、病状を示す数値は遅々として改善しない。治療が長引くのを覚



悟し、「まな板の鯉」と開き直ってはいても入院が3ヶ月近くにもなると、先行きへの不安や焦りは募ってくる。

そんな中、妻は毎日、規則正しく元気な笑顔を見せにくる。いつしか、それだけが私の救いになっていた。

数日前の明け方、夢をみた。私の財布の中で黒いものが動いている。良く見ると、小さな亀がごそごそと動いているのである。それを妻に話すと、それは吉兆だと言って、明くる日200円の宝くじを10枚買って来た。当選がすぐに分かる宝くじである。面会ルームで2人で開けてみると、何と5,000円が当たっているではないか。妻はそれをみて真剣な顔で私に言った。「お父さん、今度は鶴の夢をみてね。病気がすぐに良くなるから」。

妻は病人と一緒にあって不運を嘆いてばかりいられない。家庭の中に一点でも翳りがあれば、それを吹き飛ばす明るい光をともし続けなければならないのである。妻の気持ちが痛いほど分かった。

私はその感謝も込めて、何がなんでも鶴の夢をみななければならない。

( 関東労災病院入院中 )

おわり